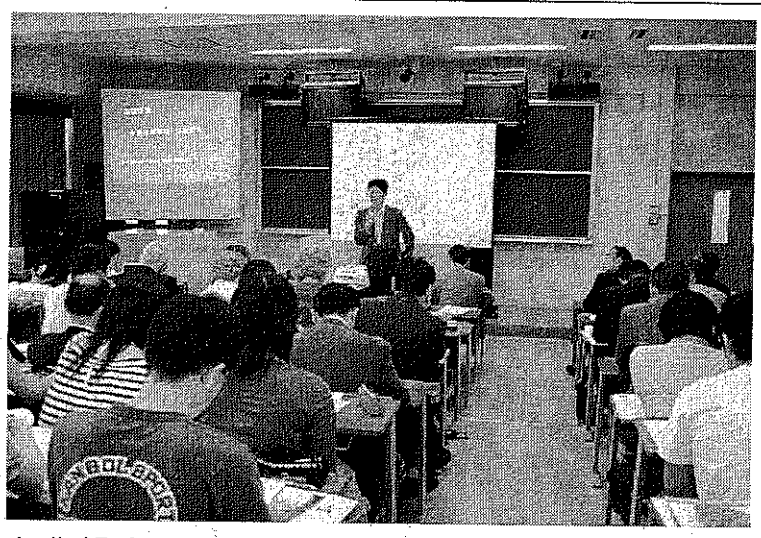
挑戦続く環境教育

宮教大でシンポジウム

宮城教育大は二〇〇五年度から三年計画で、「環境教育による教科横断型カリキュラム開発配信事業」を実施している。学校現場を支援する「環境教育ライブラリー・えるふぇ」を創設し、教材の貸し出しや情報提供などに取り組む。事業の成果を報告、集めた資料や教材の内容などを公開しようと、六月十六日に仙台市青葉区の同大で開かれたシンポジウムを紹介する。



■幅広く関連

文部科学省初等中等教育局主任視学官で教育課程担当リーダーの上月正博氏は、「学習指導要領と環境教育」と題して基調講演した。

現在の指導要領には、科学技術から環境に配慮した生活の工夫まで、各教科の幅広い分野を環境と関連付ける視点があると解説。現行の教育基本法では教育目標に環境の保全などが位置付けられていることを説明し、「環境教育につながる重要な理念だ」と説いた。

近年、人の話を聞くことができない、語彙（ごい）が乏しく、情緒をうまく表せないといった児童生徒が見受けられることから、上月氏は「『言葉』と『体験』を重視し、学習や生活の基盤をつくることが必要になっている」と指摘。その上で「環境教育でも言葉と体験は大切。言葉をうまく使って、仲間と体験を共有することが大事だ」と述べた。

■増す重要度

環境省総合環境政策局環境教育推進室の北沢克巳室長は「環境行政の動向と環境教育」をテーマに講演した。

生物の絶滅種は一九〇〇―六〇年に年間一種だったが、六〇―七五年は千種、七五年以降は四万種と増加している状況を、「人口増加や食料運搬能力の向上など、人間の影響が生物の多様性の危機を招いている」と分析。地球規模で温暖化が深刻化するなど、環境教育がより重視されている背景を説明した。

六月に閣議決定された「二十一世紀環境立国戦略」には「環境を感じ、考え、行動する人づくり」が掲げられていることを受け、北沢氏は「企業による教育や地域での活動など、環境教育・学習の機会の多様化が図られ、国民運動の展開も期待されている」と語った。

■チョウ題材

宮教大環境教育実践研究センターの教員四人は「えるふぇ」の活動について報告した。

斉藤千映美准教授（動物生態学）は教科横断型の環境教育カリキュラムに関し、学校現場では大勢の教員が携わりながら、内容はリサイクルや省エネルギーなどにとどまっている現状を示した。

カリキュラム作成は教員の負担が大きく、各教科の学習目標を損なわずに横断型の環境教育を進めることも難しいといった問題点を踏まえ、「指導者の支援が求められている」と強調し、分かりやすいガイドライン、カリキュラムの提供を検討課題に挙げた。

清田浩二助教（昆虫学）は、センター近くに設けたバタフライガーデンについて発表した。チョウの飼育・観察、植物栽培、落ち葉のリサイクルなどを通じて教科横断的な環境教育のカリキュラムを作成する狙いだ。

マニュアルや道具をセットにした標本作製キットを作ったり、QRコード（二次元コード）を付けた札を設置して、携帯電話で情報を得られる案内ガイドを用意したりしたい」と展望を語った。

参加者が環境教育への理解を深めたシンポジウム＝仙台市青葉区の宮城教育大

文科省 上月氏
環境省 北沢氏
大学側

言葉と体験が大事
学習の多様化期待
指導者の支援課題

教育

感想募集　「教育のページ」に対する意見や感想をお寄せください。あて先は〒980―8660仙台市青葉区五橋1の2の28、河北新報社報道部「教育のページ」係。住所、氏名、年齢、職業、電話番号を明記してください。ファクスは022(211)1256。電子メールのアドレスはyugun@po.kahoku.co.jp